慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	C・W・フェルプス著 企業金融の一手段としての売掛金金融
Sub Title	Clyde William Phelps, Accounts receivable financing as a method of business finance
Author	片岡, 一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.3 (1958. 3) ,p.276(82)- 279(85)
JaLC DOI	10.14991/001.19580301-0082
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580301-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

C・W・フェルプス著『企業金融の一手段としての売掛金金融』

(Clyde William Phelps, Accounts Receivable Financing as a Method of Business Finance. Studies in Commercial Financing, No. 2, Educational Division Commercial Credit Company, Baltimore, 1957.)

最近の日銀の調査が明らかにしたところによれば、わが国の月賦販売総額は、昭和三十一年にはついに二五〇〇億円にも達し、ごの額は丁度昭和二十八年の二倍に相当する額であるが、このような異常な伸びを示したことの背後には各業界の生産過剰傾向の存在が指摘されなければならないであろう。そしてかかる生産過剰の傾向が依然続く限り、月賦販売総額は今後もさらに大きく伸びて行くことが予想され、それだけにまた月賦販売制度に対する世間の関心も大きくなって来つつある。

此の月賦販売制度そのものはわが国においてもかなり古い歴史を有しており、徳川期に盛行した頼母子講は別としても、既にシンガーミシン会社は明治三十四年わが国にその支店を設置し月賦販売を始めている。爾来多少の起伏はみられたものの、今日までそれは小売商にとってもまた製造業者にとっても重要な販売促進策として注目されてきたものである。しかし此の販売制度は、既にわが国へのその移入の経緯からも明らかなように、典形的には合衆国において最も顕著な発達を示したものであって、産業革命を転機として一般に行われるようになった大量生産、そしてそれに基く小売販売業者の地位の確立、都市人口の増大、定額所得者たる俸給生活階級の発生という、かかる一連の事実の結果として発生し発達し来ったものである。そして今日においてはそれは単に企業の一販売政策たる地位にとどまらず、むしろアメリカ経済の景気の起伏を支える巨大な力にまで成長して来ている。しかし合衆国において月賦販売制度をかくも大きく発展せしめた最も大きな力としては金融会社の果した役割を無視することはできない。月賦販売には販売促進の一面と消費金融の一面とがあることはいうまでもないが、この販売、金融の二機能が夫々販売業者と消費金融会社とに分担されることによってはじめてあの驚くべき発展を築きえたとみるべきであろう。

だが一方月賦販売制度はアメリカにおいても必ずしも順調な発展を続けて来たものではなかった。それは浪費を促進するものとして一部からは絶えず批判されて来たのであったし、また例えば一九四一年のW規則の公布にもみられるように、時には国家の規制により抑制せられることもあった。が、しかしそれがアメリカにおける国民生活水準の向上のために寄与して来た点は何人も否定しえないし、またそれだけに反面社会の注目を浴び、鋭い批判にもさらされなければならなかった。事実此の制度が確固たる基礎を有するに至ったアメリカにおいてすらなおきびしい批判が存するのであり、これらの批判に対しては当然これを受ける立場にある者の側から何等かの解答が用意されなければならないであろう。

合衆国における消費金融の大半は今日三大消費金融会社によってなされている現状であるが、その三大金融会社の一たる Commercial Credit Company はこれまで一には月賦購入に対する世の批判に答えるため、そしてまた一にはより積極的に消費金融会社の経済的機能、その存立の社会的意義についての世間の理解をもとめてすでに The Role of the Sales Finance Companies in the American Economy (1952); Instalment Sales Financing: Its services to the Dealer (1953); Financing the Instalment Purchases of the American Family (1954); Using Instalment Credit (1955), なる四冊の消費金融叢書を発刊している。しかし乍ら今日の合衆国における消費金融会社の金融対象は、もっともその大半が依然消費金融たることには変わりはないが、各企業の売掛金金融にまで拡大されて来ている。企業の繁栄と発展が企業の利用しうる運転資金の量に大きく依存するものであるならば売掛金金融の重要性は益々大とみなければならないであろう。事実合衆国における売掛金金融の額は一九四一年の五億ドル余から五六年の五六億ドルへと実に一〇倍余に及ぶ飛躍的増大を示しているが、此の事実は売掛金金融が如何にその重要度を高めて来ているかを如実に示しているものと解される。と同時にそれはまた商業金融機関として金融会社が重要性を高めて来ていることの証左でもある。かかる事実に鑑みて Commercial Credit Company は前記の「消費金融叢書」に引続いて「商業金融叢書」を発刊するに至ったのであるが、此処に紹介しようとするフェルプス教授の手になる「企業金融の手段としての売掛金金融」(Clyde William Phelps, Accounts Receivable Financing as a Method of Business Finance, 1957)は同教授によって先年出版せられた C. W. Phelps, The Role of Factoring in Modern Business Finance, 1956. と並んで右叢書の一部を構成するものである。かかる本書出版の経緯からも明らかなように本書は Commercial Credit Company のP・Rの一環として意図されたものである。が、しかしその分析、論述そのものにはあくまでも客観的立場が貫ぬかれていることはいうまでもない。

先にもふれた如く、金融会社による売掛金金融は今日五〇億ドル以上の金融を行うことによって、それは合衆国企業の資金繰りにとっては不可欠な存在となって来てはいるが、しかし著者のはしがきにものべられているように必ずしもそれは商業銀行程十分な理解と認識をえるには至っていない。金融会社が顕著な発展を示すようになったのは今世紀の十年代以降、特に第二次大戦以降であって、その起源はアレクサンダー・ダンカンが Manufacturers' Finance

Company を創立した一九〇九年であるとされている。一九〇四年シカゴ市においてジョーンズ及びリトルの二人はエンサイクロペディア・アメリカナの月賦販売を行っていたが、彼等はもし十分な現金を調達しうるならばその販売高をいちじるしく増大せしめうるであろうと確信するに至り、そこでこの必要を解決するために企業の売掛金を買取ることにより金融を行う特殊な金融機関の創立を企図するに至った。かくして一九〇五年ジョーンズ及びリトルは Mercantile Credit Company を創立したのであるが、しかしそれは今日普通にいわれる金融会社とは売掛金の買取りに当って債務者への通知を必要としたという点において異なり、「貸倒れの損失は顧客たる企業に帰し、且つ債務者への通知を必要とすることなく売掛金を購入し金融を行う、あるいは売掛金を担保に貸付を行う金融会社」は Mercantile Credit Company の取締役の一人であったダンカンによって一九〇九年はじめて創立せられた。さらにダンカンは一九一二年 Commercial Credit Company を設立したが、此の会社も同様商業金融のための会社ではあったが、しかしその後月賦販売のための金融業務を兼営するに至り、今日では「商業金融部門をもった消費金融会社とみなされる」程になっている。その後売掛金金融に対する、特に中小規模の企業、卸売企業からの需要の増大につれて商業金融会社はいちじるしい発展をとげ、一九二〇年代にはその数は早くも一〇〇を超える程の発展を示した。このようにその企業数においても、また年々の金融総額においても金融会社がいちじるしい発展を示しえたのは、勿論金融会社のサーヴィスに対する需要が現実に大であったことによるのであるが、それではかかる需要は如何なる事情から創造せられたのであろうか、フェルプス教授は此の問題を次にとり上げている。

通常企業が発展過程にある場合、その資金は利潤の再投資の形式によって調達されるのであるが、しかし合衆国の企業総数の九五%を占める小企業は特にブーム時に必要な資金を充すに十分な利潤を上げることは事実上不可能である。もし不可能であるとすれば、結局解決の途は外部資金を集めること以外には求めえない。だが、たしかに株式会社の場合であれば、もっともそれは極めて困難であり、経費の嵩むものではあるが、株式の発行により、また合資会社の場合であれば新たな出資者を経営に参加させることにより解決しうるであろうが、しかしそれは小企業主が特に嫌悪する企業に対する企業主の主体性、統制力の弱体化を意味する。かくして特に小企業者の資金難解決の途は必然売掛金金融に向けられることとなる。第二に考えられる事情は、資金の必要は普通例えば社債の発行によって解決せられているが、しかしそれは一定の期間が確定せられており、その間はかりに不要となった場合においても返済しえないという不便がある。もっとも小企業の場合は社債の発行そのものが既に不可能なことなのであるが、売掛金金融はかかる不便を伴わず極めて伸縮的であること。そして第三には、商業銀行からの借入れは担保を必要とし、特に信用力の弱い小企業の場合は貸付をうけることは困難である。もしかりにできえた場合でもなお当該銀行へ貸付額の二〇%相当の預金残を要求せられるのが通常である。しかるに売掛金金融の場合は売掛金という保証の下で極めて低い費用で且つ容易に資金の供給をうけうる。この外たとえば売掛金として固定化された運転資金の回転を高めうること、利潤の機会を資金不足のために見逃さざるをえないような不便を解消しうること、さらには売掛金金融を利用する企業は金融会社に雇傭せられている専門家から、勿論それは経営に対する干渉、統制を毫も意味するものではないが、管理会計上の助言をうけうるなど、多くの利点をフェルプス教授はあげている。が、これを要するに大銀行からはその信用力の弱少な故をもって見放された中小規模企業の金融機関として極めて機動的な経営を行うことをもって特色とした、いわば金融組織の盲点をついた経営が今日の発展をもたらしたものと解すべく、だが反面かかる特色は、そのまま金融会社の発展を制約する一つの枠とみなさるべきであろう。

フェルプス教授は最後に、運転資金の必要が益々大となりつつあること、そしてまた例えば一九三〇年代の不況以来銀行で売掛金金融にのり出したものが多数あるとの事実が示すように、かかる業務に対する世間の認識が高まったことなどを論拠として将来の発展を予想しているのであるが、銀行の平均利子率が五・六%から三・二%の水準にあるのに対して大金融会社の場合ですら一〇%から一五%、小金融会社の場合では一八乃至二〇%と、そこにはかなりの開差がみられる。この開差はその営業の性質から不可避的なものであり、不当な利子率は金融機関相互間の激しい競争が許さないと著者はのべているが、その対象が主として他に資金の供給を求めえない小企業であることを考えるならば少しく楽観的すぎるのではないかとの疑念をいだかざるをえない。

（片岡　一郎）

書評及び紹介

ジャン・マルシャル著

『人間観、世界観一般としてのマルクス主義』

Jean Marchal; Le Marxisme comme conception générale de l'Homme et du Monde, dans '*Deux Essais sur le Marxisme*.'

最近サルトルは、「現在のマルクス主義に必要なのは〝具体的な人間学〟である」といっているが、自然科学の著しい発達に応じて、刻々変化する産業技術や文明の中で人間の主体性を確立するために、ヒューマニズムの問題が一つの焦点となり、それと関連して、マルクス主義の人間観、人間の自己疎外、さらに初期マルクスの思想の研究が、近年すこぶる活潑となった。フランスにおいては、P. Bigo; Marxisme et humanisme, introduction à l'œuvre économique de Karl Marx, 1953. A. Cornu; La jeunesse de Karl Marx, 1934. Karl Marx et la pensée moderne, com-